

## ⑱ 生体部分肝移植世界最長生存犬の像



昭和 56 年 (1981)、弘前大学医学部第二外科 (現消化器外科) では、世界に先駆けてイヌを用いた生体部分肝移植実験を開始しました。昭和 63 年 (1988) には移植後 40 日の生存記録を達成し、大動物における生体部分肝移植技術を確立しました。その後、京都大学、東京大学、東北大学などで生体部分肝移植の動物実験が開始されましたが、現在もこの 40 日が世界最長生存記録となっています。その後、これらの大動物実験の研究成果をもとに臨床応用へと発展し、末期肝疾患に苦しむ患者さんの救命的治療法の一つとして確立されました。

像のモデルとなった肝移植犬の名前は「ヨーコ」、メス犬です。動物実験施設の屋上で元気に散歩している姿の写真をもとに像が造られました。よく見ると胴巻きのようなものを付けていますが、これは術創を保護するため

にブック生地を用いて手縫いで作製したジャケットです。

この生体部分肝移植の成功により多くの患者を救うことになったのは、第二外科グループとその実験に供せられた実験動物犬であり、特に世界最長生存犬「ヨーコ」に負うところがきわめて大きいので、これを顕彰するため、第二外科学教室同窓会「三葉会」の寄贈により銅像が建立されました。緑に囲まれた医学部臨床研究棟正面玄関北側に建っています。

### 〔引用文献〕

1. 医学部広報委員会 (編) (2011) . 医学部ウォーカー, 58, 4.
2. 遠藤正彦(2011) . 弘前大学学報「平成 22 年度学位記伝達式(医学研究科)」, 84, 7-8.

(碑文)

生体部分肝移植世界最長生存犬の像

1981年弘前大学医学部外科学第二講座(現消化器外科学講座)では、世界に先駆けてイヌを用いた生体部分肝移植実験を開始した。

1988年には移植後40日に及ぶ世界最長生存記録を樹立し、大動物における生体部分肝移植手術技術を確立した。その後、臨床応用へと発展し、難治性肝疾患に苦しむ患者さんの救命的治療法として、世界中に普及した。

この像は、世界最長生存犬「ヨーコ」が移植後元気に散歩する姿をもとに作製した。